

昭和二十二年法律第二百二十四号

戸籍法

目次

第一章 総則(第一条―第五条)

第二章 戸籍簿(第六条―第十二条の二)

第三章 戸籍の記載(第十三条―第二十四条)

第四章 届出

第一節 通則(第二十五条―第四十八条)

第二節 出生(第四十九条―第五十九条)

第三節 認知(第六十条―第六十五条)

第四節 養子縁組(第六十六条―第六十九条の二)

第五節 養子離縁(第七十条―第七十三条の二)

第六節 婚姻(第七十四条―第七十五条の二)

第七節 離婚(第七十六条―第七十七条の二)

第八節 親権及び未成年者の後見(第七十八条―第八十五条)

第九節 死亡及び失踪(第八十六条―第九十条)

第十節 生存配偶者の復氏及び姻族関係の終了(第九十一条―第九十六条)

第十一節 推定相続人の廃除(第九十七条)

第十二節 入籍(第九十八条―第九十九条)

第十三節 分籍(第一百条―第一百一条)

第十四節 国籍の得喪(第一百二条―第一百六条)

第十五節 氏名の変更(第一百七条―第一百七十条の二)

第十六節 転籍及び就籍(第一百八条―第一百二十二条)

第五章 戸籍の訂正(第一百三十三―第一百七十条)

第六章 電子情報処理組織による戸籍事務の取扱に関する特例等(第一百八条―第二百一十一条の三)

第七章 不服申立て(第二百二十二条―第二百二十五条)

第八章 雑則(第二百六条―第三百一一条)

第九章 罰則(第三百二条―第四百条)

附則

第一章 総則

第一条 戸籍に関する事務は、この法律に別段の定めがあるものを除き、市町村長がこれを管掌する。

前項の規定により市町村長が処理することとされている事務は、地方自治法(昭和二十二年法律第六十七号)第二十九項第一号に規定する第一号法定受託事務とする。

第二条 市町村長は、自己又はその配偶者、直系尊属若しくは直系卑属に関する戸籍事件については、その職務を行うことができない。

第三条 法務大臣は、市町村長が戸籍事務を処理するに当たりよるべき基準を定めることができる。

市役所又は町村役場の所在地を管轄する法務局又は地方法務局長(以下「管轄法務局長」という。)は、戸籍事務の処理に必要があると認めるときは、市町村長に対し、報告を求め、又は助言若しくは勧告をすることができる。この場合において、戸籍事務の処理の適正を確保するため特に必要があると認めるときは、指示をすることができる。

管轄法務局長等は、市町村長から戸籍事務の取扱いに関する照会を受けたときその他前項の規定による助言若しくは勧告又は指示をするために必要があると認めるときは、届出人、届出事件の本人その他の関係者に対し、質問をし、又は必要な書類の提出を求めることができる。

戸籍事務については、地方自治法第二百四十五條の四、第二百四十五條の七第二項第一号、第三項及び第四項、第二百四十五條の八第十二項及び第十三項並びに第二百四十五條の九第二項第一号、第三項及び第四項の規定は、適用しない。

第四条 この法律中市、市長及び市役所に関する規定は、特別区においては特別区、特別区の区長及び特別区の区役所に、地方自治法第二百五十二条の十九第一項の指定都市においては区及び総合区、区長及び総合区長並びに区及び総合区の区役所にこれを準用する。

第五章 削除

第二章 戸籍簿

第六条 戸籍は、市町村の区域内に本籍を定める一の夫婦及びこれと氏を同じくする子(以下これを編製する。ただし、日本人でない者(以下「外国人」という。))と婚姻をした者又は配偶者が不在者について新たに戸籍を編製するとき、これ及びこれと氏を同じくする子(以下これを編製する)に、これを編製する。

第七条 戸籍は、これをつづつて帳簿とする。

第八条 戸籍は、正本と副本を設ける。

正本は、これを市役所又は町村役場に備へ、副本は、管轄法務局若しくは地方法務局又はその支局がこれを保存する。

第九条 戸籍は、その筆頭に記載した者の氏名及び本籍でこれを表示する。その者が戸籍から除かれた後も、同様である。

第十条 戸籍に記載されている者(その戸籍から除かれた者(その者に係る全部の記載が市町村長の過誤によつてされたものであつて、当該記載が第二十四条第二項の規定によつて訂正された場合におけるその者を除く。))又はその配偶者、直系尊属若しくは直系卑属は、その戸籍の謄本若しくは抄本又は戸籍に記載した事項に関する証明書(以下「戸籍謄本等」という。)の交付の請求をすることができる。

市町村長は、前項の請求が不当な目的によるものが明らかとなるときは、これを拒むことができる。

第一項の請求をしようとする者は、郵便その他の法務省令で定める方法により、戸籍謄本等の交付を求めることができる。

第十条の二 前条第一項に規定する者以外の者の交付の請求をすることができる。この場合において、当該請求をする者は、それぞれ当該各号に定める事項を明らかにしてこれをしなければならぬ。

一 自己の権利を行使し、又は自己の義務を履行するために戸籍の記載事項を確認する必要がある場合、権利又は義務の発生原因及び内容並びに当該権利を行使し、又は当該義務を履行するために戸籍の記載事項の確認を必要とする理由

二 国又は地方公共団体の機関に提出する必要がある場合、戸籍謄本等を提出すべき国又は地方公共団体の機関及び当該機関への提出を必要とする理由

三 前二号に掲げる場合のほか、戸籍の記載事項を利用する正当な理由がある場合、戸籍の記載事項の利用の目的及び方法並びにその利用を必要とする事由

前項の規定にかかわらず、国又は地方公共団体の機関は、法令の定める事務を遂行するために必要がある場合には、戸籍謄本等の交付の請求をすることができる。この場合において、当該請求の任に当たたる権限を有する職員は、その官職、当該事務の種類及び根拠となる法令の条

項並びに戸籍の記載事項の利用の目的を明らかにしてこれをしなければならぬ。

第一項の規定にかかわらず、弁護士(弁護士法人及び弁護士・外国法事務弁護士共同法人を含む。次項において同じ。)、司法書士(司法書士法人を含む。次項において同じ。)、土地家屋調査士(土地家屋調査士法人を含む。次項において同じ。)、税理士(税理士法人を含む。次項において同じ。)、社会保険労務士(社会保険労務士法人を含む。次項において同じ。)、弁理士(弁理士法人を含む。次項において同じ。)、海事代理士又は行政書士(行政書士法人を含む)は、受任している事件又は事務に関する業務を遂行するために必要がある場合には、戸籍謄本等の交付の請求をすることができる。この場合において、当該請求をする者は、その有する資格、当該業務の種類、当該事件又は事務の依頼者の氏名又は名称及び当該依頼者についての第一項各号に定める事項を明らかにしてこれを行わなければならない。

第一項及び前項の規定にかかわらず、弁護士、司法書士、土地家屋調査士、税理士、社会保険労務士又は弁理士は、受任している事件について次に掲げる業務を遂行するために必要がある場合には、戸籍謄本等の交付の請求をすることができる。この場合において、当該請求をする者は、その有する資格、当該事件の種類、その業務として代理し又は代理しようとする手続及び戸籍の記載事項の利用の目的を明らかにしてこれをしなければならない。

一 弁護士にあつては、裁判手続又は裁判外における民事上若しくは行政上の紛争処理の手続についての代理業務(弁護士法人については弁護士法(昭和二十四年法律第二百五号)第三十条の六第一項各号に規定する代理業務を除き、弁護士・外国法事務弁護士共同法人については外国弁護士による法律事務の取扱等に関する法律(昭和六十一年法律第六十六号)第八十条第一項において準用する弁護士法第三十条の六第一項各号に規定する代理業務を除く。)

二 司法書士にあつては、司法書士法(昭和二十五年法律第九十七号)第三条第一項第三号及び第六号から第八号までに規定する代理業務(同項第七号及び第八号に規定する相談業務並びに司法書士法人については同項第六号に規定する代理業務を除く。)

三 土地家屋調査士にあつては、土地家屋調査士法（昭和二十五年法律第二百二十八号）第三条第一項第二号に規定する審査請求の手續についての代理業務並びに同項第四号及び第七号に規定する代理業務

四 税理士にあつては、税理士法（昭和二十六年法律第二百三十七号）第二条第一項第一号に規定する不服申立て及びこれに関する主張又は陳述についての代理業務

五 社会保険労務士にあつては、社会保険労務士法（昭和四十三年法律第八十九号）第二条第一項第一号の三に規定する審査請求及び再審査請求並びにこれらに係る行政機関等の調査又は処分に関し当該行政機関等に対してする主張又は陳述についての代理業務並びに同項第一号の四から第一号の六までに規定する代理業務（同条第三項第一号に規定する相談業務を除く。）

六 弁理士にあつては、弁理士法（平成十二年法律第四十九号）第四条第一項に規定する特許庁における手續（不服申立てに限る）、審査請求及び裁定に関する経済産業大臣に対する手續（裁定の取消しに限る。）についての代理業務、同条第二項第一号に規定する税関長又は財務大臣に対する手續（不服申立てに限る。）についての代理業務、同項第二号に規定する代理業務、同法第六条に規定する訴訟の手續についての代理業務並びに同法第六条の二第二項に規定する特定侵害訴訟の手續についての代理業務（弁理士法人については同法第六条に規定する訴訟の手續についての代理業務及び同項に規定する特定侵害訴訟の手續についての代理業務を除く。）

第一項及び第三項の規定にかかわらず、弁護士は、刑事に関する事件における弁護人としての業務、少年の保護事件若しくは心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律（平成十五年法律第百十号）第三条に規定する処遇事件における付添人としての業務、逃亡犯罪人引渡審査請求事件における補佐人としての業務、人身保護法（昭和二十三年法律第九十九号）第十四条第二項の規定により裁判所が選任した代理人としての業務、人事訴訟法（平成十五年法律第九十九号）第十三条第二項及び第三項の規定により裁判長が選任した訴訟代理人としての業務又は民事訴訟法（平成八年法律第九十九号）第三十五条第一項に

規定する特別代理人としての業務を遂行するために必要がある場合には、戸籍謄本等の交付の請求をすることが出来る。この場合において、当該請求をする者は、弁護士の資格、これらの業務の別及び戸籍の記載事項の利用の目的を明らかにしてこれをしなければならぬ。

前条第三項の規定は、前各項の請求をしようとする者について準用する。

第十条の三 第十条第一項又は前条第一項から第五項までの請求をする場合において、現に請求の任に当たっている者は、市町村長に対し、運転免許証を提示する方法その他の法務省令で定める方法により、当該請求の任に当たっている者を特定するために必要な氏名その他の法務省令で定める事項を明らかにしなければならぬ。

前項の場合において、現に請求の任に当たっている者が、当該請求をする者（前条第二項の請求にあつては、当該請求の任に当たる権限を有する職員。以下この項及び次条において「請求者」という。）の代理人であるときその他請求者と異なる者であるときは、当該請求の任に当たっている者は、市町村長に対し、法務省令で定める方法により、請求者の依頼又は法令の規定により当該請求の任に当たるものであることを明らかにする書面を提出しなければならぬ。

第十条の四 市町村長は、第十条の二第一項から第五項までの請求がされた場合において、これらの規定により請求者が明らかにしなければならぬ事項が明らかにされていないと認めるときは、当該請求者に対し、必要な説明を求めることが出来る。

第十一条 戸籍簿の全部又は一部が、滅失したとき、又は滅失のおそれがあるときは、法務大臣は、その複製又は補充について必要な処分を指示する。この場合において、滅失したものであるときは、その旨を告示しなければならない。

第十一条の二 虚偽の届出等（届出、報告、申請、請求若しくは囑託、証書若しくは航海日誌の謄本又は裁判をいう。以下この項において同じ。）若しくは錯誤による届出等又は市町村長の過誤によつて記載がされ、かつ、その記載につき第二十四条第二項、第百十三号、第百十四条又は第百十六条の規定によつて訂正がされた戸籍について、当該戸籍に記載されている者（その戸籍から除かれた者を含む。次項において

て同じ。）から、当該訂正に係る事項の記載のない戸籍の複製の申出があつたときは、法務大臣は、その複製について必要な処分を指示する。ただし、複製によつて記載に錯誤又は遺漏がある戸籍となるときは、この限りでない。

市町村長が記載をするに当たつて文字の訂正、追加又は削除をした戸籍について、当該戸籍に記載されている者から、当該訂正、追加又は削除に係る事項の記載のない戸籍の複製の申出があつたときも、前項本文と同様とする。

第十二条 一 戸籍内の全員をその戸籍から除いたときは、その戸籍は、これを戸籍簿から除いて別につづり、除籍簿として、これを保存する。

第九条、第十一条及び前条の規定は、除籍簿及び除かれた戸籍について準用する。

第十二条の二 第十条から第十条の四までの規定は、除かれた戸籍の謄本若しくは抄本又は除かれた戸籍に記載した事項に関する証明書（以下「除籍謄本等」という。）の交付の請求をする場合に準用する。

第十三章 戸籍の記載

第十三条 戸籍には、本籍の外、戸籍内の各人について、左の事項を記載しなければならない。

- 一 氏名
- 二 出生の年月日
- 三 戸籍に入った原因及び年月日
- 四 実父母の氏名及び実父母との続柄
- 五 養子であるときは、養親の氏名及び養親との続柄
- 六 夫婦については、夫又は妻である旨
- 七 他の戸籍から入つた者については、その戸籍の表示
- 八 その他法務省令で定める事項

第十四条 氏名を記載するには、左の順序による。

- 第一 夫婦が、夫の氏を称するときは夫、妻の氏を称するときには妻
- 第二 配偶者
- 第三 子

子の間では、出生の前後による。

戸籍を編製した後にその戸籍に入るべき原因が生じた者については、戸籍の末尾にこれを記載する。

第十五条 戸籍の記載は、届出、報告、申請、請求若しくは囑託、証書若しくは航海日誌の謄本又は裁判によつてこれをする。

第十六条 婚姻の届出があつたときは、夫婦について新戸籍を編製する。但し、夫婦が、夫の氏

を称する場合に夫、妻の氏を称する場合には妻が戸籍の筆頭に記載した者であるときは、この限りでない。

前項但書の場合には、夫の氏を称する妻は、夫の戸籍に入り、妻の氏を称する夫は、妻の戸籍に入る。

日本人と外国人との婚姻の届出があつたときは、その日本人について新戸籍を編製する。ただし、その者が戸籍の筆頭に記載した者であるときは、この限りでない。

第十七条 戸籍の筆頭に記載した者及びその配偶者以外の者がこれと同一の氏を称する子又は養子を有するに至つたときは、その者について新戸籍を編製する。

第十八条 父母の氏を称する子は、父母の戸籍に入る。

前項の場合を除く外、父の氏を称する子は、父の戸籍に入り、母の氏を称する子は、母の戸籍に入る。

養子は、養親の戸籍に入る。

第十九条 婚姻又は養子縁組によつて氏を改めた者が、離婚、離縁又は婚姻若しくは縁組の取消によつて、婚姻又は縁組前の氏に復するときは、婚姻又は縁組前の戸籍に入る。但し、その戸籍が既に除かれているとき、又はその者が新戸籍編製の申出をしたときは、新戸籍を編製する。

前項の規定は、民法第七百五十一条第一項の規定によつて婚姻前の氏に復する場合及び同法第七百九十一条第四項の規定によつて従前の氏に復する場合にこれを準用する。

民法第七百六十七条第二項（同法第七百四十九条及び第七百七十一条において準用する場合を含む。）又は同法第八百六十六条第二項（同法第八百八条第二項において準用する場合を含む。）の規定によつて離婚若しくは婚姻の取消し又は離縁若しくは縁組の取消しの際に称していた氏を称する旨の届出があつた場合において、その届出をした者を筆頭に記載した戸籍が編製されていないとき、又はその者を筆頭に記載した戸籍に在る者が他にあるときは、その届出をした者について新戸籍を編製する。

第二十条 前二条の規定によつて他の戸籍に入るべき者に配偶者があるときは、前二条の規定にかかわらず、その夫婦について新戸籍を編製する。

第二十条の二 第一百七条第二項又は第三項の規定によつて氏を変更する旨の届出があつた場合に

を称する場合に夫、妻の氏を称する場合には妻が戸籍の筆頭に記載した者であるときは、この限りでない。

前項但書の場合には、夫の氏を称する妻は、夫の戸籍に入り、妻の氏を称する夫は、妻の戸籍に入る。

日本人と外国人との婚姻の届出があつたときは、その日本人について新戸籍を編製する。ただし、その者が戸籍の筆頭に記載した者であるときは、この限りでない。

第十七条 戸籍の筆頭に記載した者及びその配偶者以外の者がこれと同一の氏を称する子又は養子を有するに至つたときは、その者について新戸籍を編製する。

第十八条 父母の氏を称する子は、父母の戸籍に入る。

前項の場合を除く外、父の氏を称する子は、父の戸籍に入り、母の氏を称する子は、母の戸籍に入る。

養子は、養親の戸籍に入る。

第十九条 婚姻又は養子縁組によつて氏を改めた者が、離婚、離縁又は婚姻若しくは縁組の取消によつて、婚姻又は縁組前の氏に復するときは、婚姻又は縁組前の戸籍に入る。但し、その戸籍が既に除かれているとき、又はその者が新戸籍編製の申出をしたときは、新戸籍を編製する。

前項の規定は、民法第七百五十一条第一項の規定によつて婚姻前の氏に復する場合及び同法第七百九十一条第四項の規定によつて従前の氏に復する場合にこれを準用する。

民法第七百六十七条第二項（同法第七百四十九条及び第七百七十一条において準用する場合を含む。）又は同法第八百六十六条第二項（同法第八百八条第二項において準用する場合を含む。）の規定によつて離婚若しくは婚姻の取消し又は離縁若しくは縁組の取消しの際に称していた氏を称する旨の届出があつた場合において、その届出をした者を筆頭に記載した戸籍が編製されていないとき、又はその者を筆頭に記載した戸籍に在る者が他にあるときは、その届出をした者について新戸籍を編製する。

第二十条 前二条の規定によつて他の戸籍に入るべき者に配偶者があるときは、前二条の規定にかかわらず、その夫婦について新戸籍を編製する。

第二十条の二 第一百七条第二項又は第三項の規定によつて氏を変更する旨の届出があつた場合に

において、その届出をした者の戸籍に在る者が他にあるときは、その届出をした者について新戸籍を編製する。

第七百七条第四項において準用する同条第一項の規定によつて氏を変更する旨の届出があつたときは、届出事件の本人について新戸籍を編製する。

第二十條の三 第六十八條の二の規定によつて縁組の届出があつたときは、まず養子について新戸籍を編製する。ただし、養子が養親の戸籍に在るときは、この限りでない。

第十四條の三 第三項の規定は、前項ただし書の場合に準用する。

第二十條の四 性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律（平成十五年法律第百一十一号）第三条第一項の規定による性別の取扱いの変更の審判があつた場合において、当該性別の変更の審判を受けた者の戸籍に記載されている者（その戸籍から除かれた者を含む）が他にあるときは、当該性別の取扱いの変更の審判を受けた者について新戸籍を編製する。

第二十一條 成年に達した者は、分籍をすることができ。但し、戸籍の筆頭に記載した者及びその配偶者は、この限りでない。

第二十二條 父又は母の戸籍に入る者を除く外、戸籍に記載がない者についてあらたに戸籍の記載をすべきときは、新戸籍を編製する。

第二十三條 第十六條乃至第二十一條の規定によつて、新戸籍を編製され、又は他の戸籍に入る者は、従前の戸籍から除籍される。死亡し、失踪の宣告を受け、又は国籍を失つた者も、同様である。

第二十四條 戸籍の記載が法律上許されないものであること又はその記載に錯誤若しくは遺漏があることを発見した場合には、市町村長は、遅滞なく届出人又は届出事件の本人にその旨を通知しなければならない。ただし、戸籍の記載、届書の記載その他の書類から市町村長において訂正の内容及び事由が明らかであると認めるときは、この限りでない。

前項ただし書の場合においては、市町村長は、管轄法務局長等の許可を得て、戸籍の訂正をすることができる。

前項の規定にかかわらず、戸籍の訂正の内容が軽微なものであつて、かつ、戸籍に記載され

ている者の身分関係についての記載に影響を及ぼさないものについては、同項の許可を要しない。

裁判所その他の官庁、検察官又は吏員がその職務上戸籍の記載が法律上許されないものであること又はその記載に錯誤若しくは遺漏があることを知つたときは、遅滞なく届出事件の本人の本籍地の市町村長にその旨を通知しなければならない。

第四章 届出 第一節 通則

第二十五條 届出は、届出事件の本人の本籍地又は届出人の所在地でこれをしなければならない。

第二十六條 本籍が明かでない者又は本籍がない者について、届出があつた後に、その者の本籍が明かになつたとき、又はその者が本籍を有するに至つたときは、届出人又は届出事件の本人は、その事実を知つた日から十日以内に、届出事件を表示して、届出を受理した市町村長にその旨を届け出なければならない。

第二十七條 届出は、書面又は口頭でこれを行うことができる。

第二十七條の二 市町村長は、届出によつて効力を生ずべき認知、縁組、離婚、婚姻又は離婚の届出（以下この条において「縁組等の届出」という。）が市役所又は町村役場に出頭した者によつてされる場合には、当該届出した者に対し、法務省令で定めるところにより、当該届出した者が届出事件の本人（認知にあつては認知する者、民法第七百九十七條第一項に規定する縁組にあつては養親となる者及び養子となる者の法定代理人、同法第八百一十一條第二項に規定する離縁にあつては養親及び養子の法定代理人となるべき者とする。次項及び第三項において同じ。）であるかどうかの確認をするため、当該届出した者を特定するために必要な氏名その他の法務省令で定める事項を示す運転免許証その他の資料の提供又はこれらの事項についての説明を求めるものとする。

市町村長は、縁組等の届出があつた場合において、届出事件の本人のうちに、前項の規定による措置によつては市役所又は町村役場に出頭して届け出たことを確認することができない者があるときは、当該縁組等の届出を受理した後

遅滞なく、その者に対し、法務省令で定める方法により、当該縁組等の届出を受理したことを通知しなければならない。

何人も、その本籍地の市町村長に対し、あらかじめ、法務省令で定める方法により、自ら届出事件の本人とする縁組等の届出がされた場合であつても、自らが市役所又は町村役場に出頭して届け出たことを第一項の規定による措置により確認することができないときは当該縁組等の届出を受理しないよう申し出ることができる。

市町村長は、前項の規定による申出に係る縁組等の届出があつた場合において、当該申出をした者が市役所又は町村役場に出頭して届け出たことを第一項の規定による措置により確認することができなかつたときは、当該縁組等の届出を受理することができない。

市町村長は、前項の規定により縁組等の届出を受理することができなかつた場合は、遅滞なく、第三項の規定による申出をした者に対し、法務省令で定める方法により、当該縁組等の届出があつたことを通知しなければならない。

第二十七條の三 市町村長は、次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、届出人、届出事件の本人その他の関係者に対し、質問をし、又は必要な書類の提出を求めることができる。

- 一 届出の受理に際し、この法律の規定により届出人が明らかにすべき事項が明らかにされないとき。
- 二 その他戸籍の記載のために必要があるとき。

第二十八條 法務大臣は、事件の種類によつて、届書の様式を定めることができる。

前項の場合には、その事件の届出は、当該様式によつてこれをしなければならない。但し、やむを得ない事由があるときは、この限りでない。

- 第二十九條 届書には、次の事項を記載し、届出人が、これに署名しなければならない。
- 一 届出事件
 - 二 届出の年月日
 - 三 届出人の出生の年月日、住所及び戸籍の表示
 - 四 届出人と届出事件の本人と異なるときは、届出事件の本人の氏名、出生の年月日、住所、戸籍の表示及び届出人の資格

第三十條 届出事件によつて、届出人又は届出事件の本人が他の戸籍に入るべきときは、その戸籍の表示を、その者が従前の戸籍から除かれるべきときは、従前の戸籍の表示を、その者について新戸籍を編製すべきときは、その旨、新戸籍編製の原因及び新本籍を、届書に記載しなければならない。

届出事件によつて、届出人若しくは届出事件の本人でない者が他の戸籍に入り、又はその者について新戸籍を編製すべきときは、届書にその者の氏名、出生の年月日及び住所を記載する外、その者が他の戸籍に入るか又はその者について新戸籍を編製するかの区別に従つて、前項に掲げる事項を記載しなければならない。

届出人でない者について新戸籍を編製すべきときは、その者の従前の本籍と同一の場所を新本籍と定めたものとみなす。

第三十一條 届出をすべき者が未成年者又は成年被後見人であるときは、親権を行う者又は後見人を届出義務者とする。ただし、未成年者又は成年被後見人が届出をすることを妨げない。

親権を行う者又は後見人が届出をする場合には、届書に次に掲げる事項を記載しなければならない。

- 一 届出をすべき者の氏名、出生の年月日及び本籍
- 二 行為能力の制限の原因
- 三 届出人が親権を行う者又は後見人である旨
- 三十二條 未成年者又は成年被後見人がその法定代理人の同意を得ないですることができ行為については、未成年者又は成年被後見人が、これを届け出なければならない。

第三十三條 証人を必要とする事件の届出については、証人は、届書に出生の年月日、住所及び本籍を記載して署名しなければならない。

第三十四條 届書に記載すべき事項であつて、存しないもの又は知れないものがあるときは、その旨を記載しなければならない。

市町村長は、特に重要であると認める事項を記載しない届書を受領することができない。

第三十五條 届書には、この法律その他の法令に定める事項の外、戸籍に記載すべき事項を明らかにするために必要であるものは、これを記載しなければならない。

第三十六條 二箇所以上の市役所又は町村役場で戸籍の記載をすべき場合には、市役所又は町村役場の数と同数の届書を提出しなければならない。

本籍地外で届出をするときは、前項の規定によるもの外、なお、一通の届書を提出しなければならぬ。

前二項の場合に、相当と認めるときは、市町村長は、届書の謄本を作り、これを届書に代えることができる。

第三十七条 口頭で届出をするには、届出人は、市役所又は町村役場に出頭し、届書に記載すべき事項を陳述しなければならない。

市町村長は、届出人の陳述を筆記し、届出の年月日を記載して、これを届出人に読み聞かせ、かつ、届出人に、その書面に署名させなければならぬ。

届出人が疾病その他の事故によつて出頭することができないときは、代理人によつて届出をすることができ、ただし、第六十条、第六十一条、第六十六条、第六十八条、第七十条から第七十二条まで、第七十四条及び第七十六条の届出については、この限りでない。

第三十八条 届出事件について父母その他の者の同意又は承諾を必要とするときは、届書にその同意又は承諾を証する書面を添付しなければならない。ただし、同意又は承諾をした者に、届書にその旨を付記させて、署名させるだけで足りる。

届出事件について裁判又は官庁の許可を必要とするときは、届書に裁判又は許可書の謄本を添付しなければならない。

第三十九条 届書に関する規定は、第三十七条第二項及び前条第一項の書面にこれを準用する。

第四十条 外国に在る日本人は、この法律の規定に従つて、その国に駐在する日本の大使、公使又は領事に届出をすることができ、

第四十一条 外国に在る日本人が、その国の方式に従つて、届出事件に関する証書を作らせたときは、三箇月以内にその国に駐在する日本の大使、公使又は領事にその証書の謄本を提出しなければならない。

大使、公使又は領事がその国に駐在しないときは、三箇月以内に本籍地の市町村長に証書の謄本を送付しなければならない。

第四十二条 大使、公使又は領事は、前二条の規定によつて書類を受理したときは、遅滞なく、外務大臣を経由してこれを本人の本籍地の市町村長に送付しなければならない。

第四十三条 届出期間は、届出事件発生の日からこれを起算する。

裁判が確定した日から期間を起算すべき場合に、裁判が送達又は交付前に確定したときは、その送達又は交付の日からこれを起算する。

第四十四条 市町村長は、届出を怠つた者があることを知つたときは、相当の期間を定めて、届出義務者に對し、その期間内に届出をすべき旨を催告しなければならない。

届出義務者が前項の期間内に届出をしなかつたときは、市町村長は、更に相当の期間を定めて、催告をすることができ、

前二項の催告をすることができないとき、又は催告をしても届出がないときは、市町村長は、管轄法務局長等の許可を得て、戸籍の記載をすることができ、

第二十四条第四項の規定は、裁判所その他の官庁、検察官又は吏員がその職務上届出を怠つた者があることを知つた場合にこれを準用する。

第四十五条 市町村長は、届出を受理した場合に、届書に不備があるため戸籍の記載をすることができないときは、届出人に、その追完をさせなければならない。この場合には、前条の規定を準用する。

第四十六条 届出期間が経過した後の届出であっても、市町村長は、これを受理しなければならない。

第四十七条 市町村長は、届出人がその生存中に郵便又は民間事業者による信書の送達に関する法律（平成十四年法律第九十九号）第二条第六項に規定する一般信書便事業者若しくは同条第九項に規定する特定信書便事業者による同条第二項に規定する信書便によつて発送した届書については、当該届出人の死亡後であっても、これを受理しなければならない。

前項の規定によつて届書が受理されたときは、届出人の死亡の時に届出があつたものとみなす。

第四十八条 届出人は、届出の受理又は不受理の証明書を請求することができる。

利害関係人は、特別の事由がある場合に限り、届書その他市町村長の受理した書類の閲覧を請求し、又はその書類に記載した事項について証明書を請求することができる。

第十条第三項及び第十条の三の規定は、前二項の場合に準用する。

第二節 出生

第四十九条 出生の届出は、十四日以内（国外で出生があつたときは、三箇月以内）にこれをしなければならない。

届書には、次の事項を記載しなければならない。

- 一 子の男女の別及び嫡出子又は嫡出でない子の別
- 二 出生の年月日時分及び場所
- 三 父母の氏名及び本籍、父又は母が外国人であるときは、その氏名及び国籍
- 四 その他法務省令で定める事項

医師、助産師又はその他の者が出産に立ち会つた場合には、そのうちの一人が法務省令・厚生労働省令の定めるところによつて作成する出生証明書に添付しなければならない。ただし、やむを得ない事由があるときは、この限りでない。

第五十条 子の名には、常用平易な文字を用いなければならない。

常用平易な文字の範囲は、法務省令でこれを定める。

第五十一条 出生の届出は、出生地でこれをすることができ、

汽車その他の交通機関（船舶を除く。以下同じ。）の中で出生があつたときは母がその交通機関から降りた地で、航海日誌を備えない船舶の中で出生があつたときはその船舶が最初に入港した地で、出生の届出をすることができ、

第五十二条 嫡出子出生の届出は、父又は母がこれをし、子の出生前に父母が離婚をした場合には、母がこれをしなければならない。

嫡出でない子の出生の届出は、母がこれをしなければならない。

前二項の規定によつて届出をすべき者が届出をすることができない場合には、左の者は、その順序に従つて、届出をしなければならない。

第一 同居者

第二 出産に立ち会つた医師、助産師又はその他の者

第三 第一項又は第二項の規定によつて届出をすべき者が届出をすることができない場合には、その者以外の法定代理人も、届出をすることができる。

第五十三条 嫡出子否認の訴を提起したときであっても、出生の届出をしなければならない。

第五十四条 民法第七百七十三条の規定によつて裁判所が父を定むべきときは、出生の届出は、母がこれをしなければならない。この場合には、届書に、父が未定である事由を記載しなければならない。

第五十二条第三項及び第四項の規定は、前項の場合にこれを準用する。

第五十五条 航海中に出生があつたときは、船長は、二十四時間以内に、第四十九条第二項に掲げる事項を航海日誌に記載して、署名しなければならない。

前項の手続をした後に、船舶が日本の港に到着したときは、船長は、遅滞なく出生に関する航海日誌の謄本をその地の市町村長に送付しなければならない。

船舶が外国の港に到着したときは、船長は、遅滞なく出生に関する航海日誌の謄本をその国に駐在する日本の大使、公使又は領事に送付し、大使、公使又は領事は、遅滞なく外務大臣を経由してこれを本籍地の市町村長に送付しなければならない。

第五十六条 病院、刑事施設その他の公設所で出生があつた場合に、父母が共に届出をすることができないときは、公設所の長又は管理人が、届出をしなければならない。

第五十七条 棄児を発見した者又は棄児発見の申告を受けた警察官は、二十四時間以内にその旨を市町村長に申し出なければならない。

前項の申出があつたときは、市町村長は、氏名をつけ、本籍を定め、且つ、附属品、発見の場所、年月日時その他の状況並びに氏名、男女の別、出生の推定年月日及び本籍を調査に記載しなければならない。その調査は、これを届書とみなす。

第五十八条 前条第一項に規定する手続をする前に、棄児が死亡したときは、死亡の届出とともにその手続をしなければならない。

第五十九条 父又は母は、棄児を引き取つたときは、その日から一箇月以内に、出生の届出をし、且つ、戸籍の訂正を申請しなければならない。

第三節 認知

第六十条 認知をしようとする者は、左の事項を届書に記載して、その旨を届け出なければならない。

一 父が認知をする場合には、母の氏名及び本籍

二 死亡した子を認知する場合には、死亡の年月日並びにその直系卑属の氏名、出生の年月日及び本籍

第六十一条 胎内に在る子を認知する場合には、
届書にその旨、母の氏名及び本籍を記載し、母
の本籍地でこれを届け出なければならぬ。
第六十二条 民法第七百八十九條第二項の規定に
よつて嫡出子となるべき者について、父母が嫡
出子出生の届出をしたときは、その届出は、認
知の届出の効力を有する。

第六十三条 認知の裁判が確定したときは、訴を
提起した者は、裁判が確定した日から十日以内
に、裁判の謄本を添附して、その旨を届け出な
ければならない。その届書には、裁判が確定し
た日を記載しなければならぬ。
訴えを提起した者が前項の規定による届出を
しないときは、その相手方は、裁判の謄本を添
付して、認知の裁判が確定した旨を届け出るこ
とができる。この場合には、同項後段の規定を
準用する。

第六十四条 遺言による認知の場合には、遺言執
行者は、その就職の日から十日以内に、認知に
関する遺言の謄本を添附して、第六十條又は第
六十一條の規定に従つて、その届出をしなければ
ならない。
第六十五条 認知された胎児が死体で生まれたと
きは、出生届出義務者は、その事実を知つた日
から十四日以内に、認知の届出地で、その旨を
届け出なければならぬ。但し、遺言執行者が
前条の届出をした場合には、遺言執行者が、そ
の届出をしなければならぬ。

第四節 養子縁組
第六十六条 縁組をしようとする者は、その旨を
届け出なければならぬ。
第六十七条 削除
第六十八条 民法第七百九十七條の規定によつて
縁組の承諾をする場合には、届出は、その承諾
をする者がこれをしなければならぬ。
第六十八条の二 第六十三條第一項の規定は、縁
組の裁判が確定した場合に準用する。
第六十九条 第六十三條の規定は、縁組取消の裁
判が確定した場合にこれを準用する。

第六十九條の二 第七十三條の二の規定は、民法
第八百八條第二項において準用する同法第八百
十六條第二項の規定によつて縁組の取消しの際
に称していた氏を称しようとする場合に準用す
る。

第五節 養子離縁
第七十條 離縁をしようとする者は、その旨を届
け出なければならぬ。

第七十一条 民法第八百十一條第二項の規定によ
つて協議上の離縁をする場合には、届出は、そ
の協議をする者がこれをしなければならぬ。
第七十二条 民法第八百十一條第六項の規定によ
つて離縁をする場合には、生存当事者だけで、
その届出をすることができない。

第七十三条 第六十三條の規定は、離縁又は離縁
取消の裁判が確定した場合にこれを準用する。
第七十五条第二項の規定は、検察官が離縁の
裁判を請求した場合に準用する。
第七十三条の二 民法第八百十六條第二項の規定
によつて離縁の際に称していた氏を称しようと
する者は、離縁の年月日を届書に記載して、そ
の旨を届け出なければならぬ。

第六節 婚姻
第七十四條 婚姻をしようとする者は、左の事項
を届書に記載して、その旨を届け出なければな
らない。
一 夫婦が称する氏
二 その他法務省令で定める事項
第七十五条 第六十三條の規定は、婚姻取消の裁
判が確定した場合にこれを準用する。
検察官が訴を提起した場合には、裁判が確定
した後に、遅滞なく戸籍記載の請求をしなければ
ならない。

第七十五条の二 第七十七條の二の規定は、民法
第七百四十九條において準用する同法第七百六
十七條第二項の規定によつて婚姻の取消しの際
に称していた氏を称しようとする場合に準用す
る。
第七節 離婚
第七十六條 離婚をしようとする者は、左の事項
を届書に記載して、その旨を届け出なければな
らない。
一 親権者と定められる当事者の氏名及びその
親権に服する子の氏名
二 その他法務省令で定める事項

第七十七條 第六十三條の規定は、離婚又は離婚
取消の裁判が確定した場合にこれを準用する。
前項に規定する離婚の届書には、左の事項を
も記載しなければならぬ。
一 親権者と定められた当事者の氏名及びその
親権に服する子の氏名
二 その他法務省令で定める事項

第七十七條の二 民法第七百六十七條第二項（同
法第七百七十一條において準用する場合を含む）
の規定によつて離婚の際に称していた氏

を称しようとする者は、離婚の年月日を届書に
記載して、その旨を届け出なければならぬ。
第八節 親権及び未成年者の後見
第七十八條 民法第八百十九條第三項但書又は第
四項の規定によつて協議で親権者を定めようと
する者は、その旨を届け出なければならぬ。

第七十九条 第六十三條第一項の規定は、民法第
八百十九條第三項ただし書若しくは第四項の協
議に代わる審判が確定し、又は親権者変更の裁
判が確定した場合において親権者に、親権喪
失、親権停止又は管理権喪失の審判の取消しの
裁判が確定した場合においてその裁判を請求し
た者について準用する。
第八十條 親権若しくは管理権を辞し、又はこれ
を回復しようとする者は、その旨を届け出なけ
ればならない。

第八十一条 民法第八百三十八條第一号に規定す
る場合に開始する後見（以下「未成年者の後
見」という。）の開始の届出は、同法第八百三
十九條の規定による指定をされた未成年後見人
が、その就職の日から十日以内に、これをしな
ければならない。
届書には、次に掲げる事項を記載し、未成年
後見人の指定に関する遺言の謄本を添付しなけ
ればならない。
一 後見開始の原因及び年月日
二 未成年後見人が就職した年月日

第八十二条 未成年後見人が死亡し、又は民法第
八百四十七條第二号から第五号までに掲げる者
に該当することとなつたことによりその地位を
失つたことによつて未成年後見人が欠けたとき
は、後任者は、就職の日から十日以内に、未成
年後見人が地位を失つた旨の届出をしなければ
ならない。
数人の未成年後見人の一部の者が死亡し、又
は民法第八百四十七條第二号から第五号までに
掲げる者に該当することとなつたことによりそ
の地位を失つたときは、他の未成年後見人は、
その事実を知つた日から十日以内に、未成年後
見人が地位を失つた旨の届出をしなければなら
ない。

未成年者、その親族又は未成年後見監督人
は、前二項の届出をすることができる。
届書には、未成年後見人がその地位を失つた
原因及び年月日を記載しなければならぬ。
第八十三条 削除
第八十四条 未成年者の後見の終了の届出は、未
成年後見人が、十日以内に、これをしなければ

ならない。その届書には、未成年者の後見の終
了の原因及び年月日を記載しなければならぬ。
未成年後見監督人について準用する。
第九節 死亡及び失踪
第八十六条 死亡の届出は、届出義務者が、死亡
の事実を知つた日から七日以内（国外で死亡が
あつたときは、その事実を知つた日から三箇月
以内）に、これをしなければならぬ。
届書には、次の事項を記載し、診断書又は検
案書を添付しなければならない。
一 死亡の年月日時分及び場所
二 その他法務省令で定める事項
やむを得ない事由によつて診断書又は検案書
を得ることができないときは、死亡の事実を証
すべき書面を以てこれに代えることができる。
この場合には、届書に診断書又は検案書を得る
ことができない事由を記載しなければならぬ。

第八十七条 次の者は、その順序に従つて、死亡
の届出をしなければならぬ。ただし、順序に
かわらず届出をすることができる。
第一 同居の親族
第二 同居の親族
第三 その他の同居者
第四 家主、地主又は家屋若しくは土地の管
理人

死亡の届出は、同居の親族以外の親族、後見
人、保佐人、補助人、任意後見人及び任意後見
受任者も、これをするすることができる。
第八十八条 死亡の届出は、死亡地でこれをする
ことができる。
死亡地が明らかでないときは死体が最初に発
見された地で、汽車その他の交通機関の中で死
亡があつたときは死体をその交通機関から降ろ
した地で、航海日誌を備えない船舶の中で死亡
があつたときはその船舶が最初に入港した地
で、死亡の届出をすることができる。

第八十九条 水難、火災その他の事由によつて死
亡した者がある場合には、その取調をした官庁
又は公署は、死亡地の市町村長に死亡の報告を
しなければならぬ。但し、外国又は法務省令
で定める地域で死亡があつたときは、死亡者の
本籍地の市町村長に死亡の報告をしなければな
らない。

死亡の届出は、同居の親族以外の親族、後見
人、保佐人、補助人、任意後見人及び任意後見
受任者も、これをするることができる。
第八十八条 死亡の届出は、死亡地でこれをする
ことができる。
死亡地が明らかでないときは死体が最初に発
見された地で、汽車その他の交通機関の中で死
亡があつたときは死体をその交通機関から降ろ
した地で、航海日誌を備えない船舶の中で死亡
があつたときはその船舶が最初に入港した地
で、死亡の届出をすることができる。

第八十九条 水難、火災その他の事由によつて死
亡した者がある場合には、その取調をした官庁
又は公署は、死亡地の市町村長に死亡の報告を
しなければならぬ。但し、外国又は法務省令
で定める地域で死亡があつたときは、死亡者の
本籍地の市町村長に死亡の報告をしなければな
らない。

死亡の届出は、同居の親族以外の親族、後見
人、保佐人、補助人、任意後見人及び任意後見
受任者も、これをすることができる。
第八十八条 死亡の届出は、死亡地でこれをする
ことができる。
死亡地が明らかでないときは死体が最初に発
見された地で、汽車その他の交通機関の中で死
亡があつたときは死体をその交通機関から降ろ
した地で、航海日誌を備えない船舶の中で死亡
があつたときはその船舶が最初に入港した地
で、死亡の届出をすることができる。

第九十条 死刑の執行があつたときは、刑事施設の長は、遅滞なく刑事施設の所在地の市町村長に死亡の報告をしなければならない。

前項の規定は、刑事施設に収容中死亡した者の引取人がない場合にこれを準用する。この場合には、報告書に診断書又は検案書を添付しなければならない。

第九十一条 前二条に規定する報告書には、第八十六條第二項に掲げる事項を記載しなければならない。

第九十二条 死亡者の本籍が明かでない場合又は死亡者を認識することができない場合には、警察官は、検視調査を作り、これを添付して、遅滞なく死亡地の市町村長に死亡の報告をしなければならない。

死亡者の本籍が明かになり、又は死亡者を認識することができるに至つたときは、警察官は、遅滞なくその旨を報告しなければならない。

第九十三条 第五十五条及び第五十六条の規定は、死亡の届出にこれを準用する。

第九十四条 第六十三条第一項の規定は、失踪宣告又は失踪宣告取消の裁判が確定した場合においてその裁判を請求した者にこれを準用する。この場合には、失踪宣告の届書に民法第三十一条の規定によつて死亡したとみなされる日をも記載しなければならない。

第十節 生存配偶者の復氏及び姻族関係の終了

第九十五条 民法第七百五十一条第一項の規定によつて婚姻前の氏に復しようとする者は、その旨を届け出なければならない。

第九十六条 民法第七百二十八條第二項の規定によつて姻族関係を終了させる意思を表示しようとする者は、死亡した配偶者の氏名、本籍及び死亡の年月日を届書に記載して、その旨を届け出なければならない。

第十一節 推定相続人の廃除

第九十七条 第六十三条第一項の規定は、推定相続人の廃除又は廃除取消の裁判が確定した場合において、その裁判を請求した者にこれを準用する。

第十二節 入籍

第九十八条 民法第七百九十一条第一項から第三項までの規定によつて父又は母の氏を称しようとする者は、その父又は母の氏名及び本籍を届書に記載して、その旨を届け出なければならない。

民法第七百九十一条第二項の規定によつて父の氏を称しようとする者に配偶者がある場合には、配偶者とともに届け出なければならない。

第九十九条 民法第七百九十一条第四項の規定によつて従前の氏に復しようとする者は、同条第一項から第三項までの規定によつて氏を改めた年月日を届書に記載して、その旨を届け出なければならない。

前項の者に配偶者がある場合には、配偶者とともに届け出なければならない。

第一百条 分籍をしようとする者は、その旨を届け出なければならない。

他の市町村に新本籍を定める場合には、戸籍の本籍を届書に添付しなければならない。

第一百一条 分籍の届出は、分籍地でこれをすることができ。

第十四節 国籍の得喪

第一百二条 国籍法(昭和二十五年法律第四百七号)第三条第一項又は第十七条第一項若しくは第二項の規定によつて国籍を取得した場合の国籍取得の届出は、国籍を取得した者が、その取得の日から一箇月以内(その者がその日に国外に在るときは、三箇月以内)に、これをしなければならない。

届書には、次の事項を記載し、国籍取得を証すべき書面を添付しなければならない。

- 一 国籍取得の年月日
二 国籍取得の際に有していた外国の国籍
三 父母の氏名及び本籍、父又は母が外国人であるときは、その氏名及び国籍
四 配偶者の氏名及び本籍、配偶者が外国人であるときは、その氏名及び国籍
五 その他法務省令で定める事項

第一百二条の二 帰化の届出は、帰化した者が、告示の日から一箇月以内(これをしなければならない)に、この場合における届書の記載事項については、前条第二項の規定を準用する。

第一百三條 国籍喪失の届出は、届出事件の本人、配偶者又は四親等内の親族が、国籍喪失の事実を知つた日から一箇月以内(届出をすべき者がその事実を知つた日に国外に在るときは、その日から三箇月以内)に、これをしなければならない。

届書には、次の事項を記載し、国籍喪失を証すべき書面を添付しなければならない。

- 一 国籍喪失の原因及び年月日
二 新たに外国の国籍を取得したときは、その国籍

第一百四條 国籍法第十二條に規定する国籍の留保の意思表示は、出生の届出をすることができず(第五十二条第三項の規定によつて届出をすべき者を除く)が、出生の日から三箇月以内(日本を出国を留保する旨を届け出ることによつて、これをしなければならない)に、これをしなければならない。

天災その他第一項に規定する者の責めに帰することができない事由によつて同項の期間内に届出をすることができないときは、その期間内は、届出をすることができず(第四十條から第四二條とする)。

第一百四條の二 国籍法第十四條第二項の規定による日本の国籍の選択の宣言は、その宣言をしようとする者が、その旨を届け出ることによつて、これをしなければならない。

届書には、その者が有する外国の国籍を記載しなければならない。

第一百四條の三 市町村長は、戸籍事務の処理に際し、国籍法第十四條第一項の規定により国籍の選択をすべき者が同項に定める期限内にその選択をしていないと思料するときは、その者の氏名、本籍その他法務省令で定める事項を管轄法務局長等に通知しなければならない。

第一百五條 官庁又は公署がその職務上国籍を喪失した者があることを知つたときは、遅滞なく本籍地の市町村長に、国籍喪失を証すべき書面を添付して、国籍喪失の報告をしなければならない。

報告書には、第一百三條第二項に掲げる事項を記載しなければならない。

第一百六條 外国の国籍を有する日本人がその外国の国籍を喪失したときは、その者は、その喪失の事実を知つた日から一箇月以内(その者がその日から三箇月以内)に、その旨を届け出なければならない。

届書には、外国の国籍の喪失の原因及び年月日を記載し、その喪失を証すべき書面を添付しなければならない。

第一百五節 氏名の変更

第一百七條 やむを得ない事由によつて氏を変更しようとするときは、戸籍の筆頭に記載した者及びその配偶者は、家庭裁判所の許可を得て、その旨を届け出なければならない。

外国人と婚姻をした者がその氏を配偶者の称している氏に変更しようとするときは、その者は、その婚姻の日から六箇月以内に限り、家庭裁判所の許可を得ないで、その旨を届け出ることができる。

前項の規定によつて氏を変更した者が離婚、婚姻の取消し又は配偶者の死亡の日以後にその氏を変更の際に称していた氏に変更しようとするときは、その者は、その日から三箇月以内に限り、家庭裁判所の許可を得ないで、その旨を届け出ることができる。

第一項の規定は、父又は母が外国人である者(戸籍の筆頭に記載した者又はその配偶者を除く)でその氏をその父又は母の称している氏に変更しようとするものに準用する。

第一百七條の二 正当な事由によつて名を変更しようとする者は、家庭裁判所の許可を得て、その旨を届け出なければならない。

第一百八條 転籍をしようとするときは、新本籍を届書に記載して、戸籍の筆頭に記載した者及びその配偶者が、その旨を届け出なければならない。

他の市町村に転籍をする場合には、戸籍の本籍を届書に添付しなければならない。

第一百九條 転籍の届出は、転籍地でこれをすることができ。

第一百十條 本籍を有しない者は、家庭裁判所の許可を得て、許可の日から十日以内に就籍の届出をしなければならない。

届書には、第十三條に掲げる事項の外、就籍許可の年月日を記載しなければならない。

第一百十一條 前条の規定は、確定判決によつて就籍の届出をすべき場合にこれを準用する。この場合には、判決の謄本を届書に添付しなければならない。

第一百十二條 就籍の届出は、就籍地でこれをすることができ。

第五章 戸籍の訂正

第一百十三條 戸籍の記載が法律上許されないものであること又はその記載に錯誤若しくは遺漏があることを発見した場合には、利害関係人は、家庭裁判所の許可を得て、戸籍の訂正を申請することができる。

第一百十四條 届出によつて効力を生ずべき行為(第六十條、第六十一條、第六十六條、第六十

八条、第七十条から第七十二条まで、第七十四
条及び第七十六条の規定によりする届出に係る
行為を除く。〕について戸籍の記載をした後に、
その行為が無効であることを発見したときは、
届出人又は届出事件の本人は、家庭裁判所の許
可を得て、戸籍の訂正を申請することができる。

第百十五条 前二条の許可の裁判があつたとき
は、一箇月以内に、その謄本を添附して、戸籍
の訂正を申請しなければならない。
第百十六条 確定判決によつて戸籍の訂正をすべ
きときは、訴を提起した者は、判決が確定した
日から一箇月以内に、判決の謄本を添附して、
戸籍の訂正を申請しなければならない。

検察官が訴を提起した場合には、判決が確定
した後に、遅滞なく戸籍の訂正を請求しなけれ
ばならない。
第百十七条 第二十五条第一項、第二十七条から
第三十二条まで、第三十四条から第三十九条ま
で、第四十三条から第四十八条まで、及び第六
十三条第四項前段の規定は、戸籍訂正の申請に
準用する。

第六章 電子情報処理組織による戸籍事務
の取扱いに関する特例等
第百十八条 法務大臣の指定する市町村長は、法
務省令で定めるところにより戸籍事務を電子情
報処理組織（法務大臣の使用に係る電子計算機
（磁気ディスク（これに準ずる方法により一定
の事項を確実に記録することができ物を含む。
以下同じ。）及び入出力装置を含む。以下同
じ。）と市町村長の使用に係る電子計算機と
を電気通信回線で接続した電子情報処理組織を
いう。以下同じ。））によつて取り扱うものとす
る。ただし、電子情報処理組織によつて取り扱
うことが相当でない戸籍又は除かれた戸籍とし
て法務省令で定めるものに係る戸籍事務につ
いては、この限りでない。

前項の規定による指定は、市町村長の申出に
基づき、告示しなければならない。
第百十九条 前条第一項の場合においては、戸籍
は、磁気ディスクに記録し、これをもつて調製
する。

前項の場合においては、磁気ディスクをもつ
て調製された戸籍を蓄積して戸籍簿とし、磁気
ディスクをもつて調製された除かれた戸籍を蓄
積して除籍簿とする。
第百十九条 前条の規定により磁気ディスク
をもつて調製された戸籍又は除かれた戸籍の副

本は、第八条第二項の規定にかかわらず、法務
大臣が保存する。

第二百条 第百十九条の規定により戸籍又は除
かれた戸籍が磁気ディスクをもつて調製されて
いるときは、第十条第一項又は第十条第二第
一項から第五項まで（これらの規定を第十二条の
二において準用する場合を含む。）の請求は、
二において準用する場合を含む。）の請求は、
戸籍謄本等又は除籍謄本等に代えて、磁気ディ
スクをもつて調製された戸籍に記録されている
事項の全部若しくは一部を証明した書面（以下
「戸籍証明書」という。）又は磁気ディスクをも
つて調製された除かれた戸籍に記録されている
事項の全部若しくは一部を証明した書面（以下
「除籍証明書」という。）についてすることがで
きる。

戸籍証明書又は除籍証明書は、第百条第二項
及び第百八条第二項の規定並びに旅券法（昭和
二十六年法律第二百六十七号）その他の法令の
規定の適用については、戸籍又は除かれた戸籍
の謄本又は抄本とみなす。

第二百条 第百十九条の規定により戸籍又は
除かれた戸籍が磁気ディスクをもつて調製さ
れているときは、次の各号に掲げる請求は、当
該各号に定める者に対してもすることができ
る。

一 第十条第一項（第十二条の二において準用
する場合を含む。次項及び次条（第三項を除
く。）において同じ。）の請求 指定市町村長
（第百八条第一項の規定による指定を受け
ている市町村長をいう。以下同じ。）のうち
いずれかの者
二 第十条第二項（第十二条の二において
準用する場合を含む。次条（第三項を除く。）
において同じ。）の請求（市町村の機関がす
るものに限る。） 当該市町村の長（指定市町
村長に限る。）

前項の規定によりする第十条第一項の請求
（本籍地の市町村長以外の指定市町村長に対
してするものに限る。）については、同条第三項
及び第十条第三項の規定は適用せず、同条
第一項中「現に請求の任に当たっている者」と
あり、及び「当該請求の任に当たっている者」
とあるのは、「当該請求をする者」とする。

第二百条 前条第一項の規定によりする第
十條第一項の請求又は前条第一項の規定によ
りする第十條第二項の請求（法務省令で定め
る事務を遂行するために必要がある場合におけ
る当該請求に限る。以下この条（第三項を除
く。）において同じ。）は、戸籍電子証明書（第
百十九条の規定により磁気ディスクをもつて調
製された戸籍に記録された事項の全部又は一部
を証明した電磁的記録（電子的方式、磁気的方
式その他の他人の知覚によつては認識することが
できない方式で作られる記録であつて、電子計算
機による情報処理の用に供されるものとして法
務省令で定めるものをいう。以下同じ。）をい
う。以下同じ。）又は除籍電子証明書（第百十
九条の規定により磁気ディスクをもつて調製さ
れた除かれた戸籍に記録された事項の全部又は
一部を証明した電磁的記録をいう。以下同じ。）
についてもすることができ
る。

前項の規定によりする第十條第一項又は第十
条の二第二項の請求があつたときは、指定市町
村長は、当該請求をした者に対し、戸籍電子証
明書提供用識別符号（当該請求に係る戸籍電子
証明書を識別することができるよう付される
符号であつて、法務省令で定めるものをいう。
以下同じ。）又は除籍電子証明書提供用識別符
号（当該請求に係る除籍電子証明書を識別す
ることができるよう付される符号であつて、法
務省令で定めるものをいう。以下同じ。）を
発行するものとする。

指定市町村長は、行政機関等（情報通信技術
を活用した行政の推進等に関する法律（平成十
四年法律第五十一号）第三条第二号に規定す
る行政機関等その他の法務省令で定める者をい
う。）から、法務省令で定めるところにより、
前項の規定により発行された戸籍電子証明書提
供用識別符号又は除籍電子証明書提供用識別符
号を示して戸籍電子証明書又は除籍電子証明
書の提供を求められたときは、法務省令で定め
るところにより、当該戸籍電子証明書提供用識別
符号に対応する戸籍電子証明書又は当該除籍電
子証明書提供用識別符号に対応する除籍電子証
明書を提供するものとする。

第一項の規定によりする第十條第一項及び第
十條の二第二項の請求については、これらの規
定中「交付」とあるのは、「第百二十条の第三
項の規定により同項に規定する行政機関等に
提供すること」とし、第一項の規定によりする
第十條第一項の請求（本籍地の市町村長以外の
指定市町村長に対してするものに限る。）につ
いては、同条第三項及び第十條の二第二項の規
定は適用せず、同条第一項中「現に請求の任に

当たっている者」とあり、及び「当該請求の任
に当たっている者」とあるのは、「当該請求を
する者」とする。

第二百条 指定市町村長は、この法律の規
定により提出すべきものとされている届書若し
くは申請書又はその他の書類で戸籍の記載をす
るために必要なものとして法務省令で定めるも
の（以下この項において「届書等」という。）
を受理した場合には、法務省令で定めるところ
により、当該届書等の画像情報（以下「届書等
情報」という。）を作成し、これを電子情報処
理組織を使用して、法務大臣に提供するものと
する。

前項の規定により届書等情報の提供を受けた
法務大臣は、これを磁気ディスクに記録するも
のとする。

第二百条 二箇所以上の市役所又は町村役
場で戸籍の記載をすべき場合において、届出又
は申請を受理した市町村長が指定市町村長であ
り、かつ、当該届出又は申請により戸籍の記載
をすべき市町村長（当該届出又は申請を受理し
た市町村長を除く。）のうち指定市町村長である
もの（以下この項において「戸籍記載指定市
町村長」という。）があるときは、戸籍記載指定
市町村長が指定市町村長に対し、前条第一項の提
供を受けた旨を通知するものとする。

前項の場合においては、第三十六条第一項及
び第二項（これらの規定を第百七条において
準用する場合を含む。）の規定にかかわらず、
提出すべき届書又は申請書の数は、戸籍の記載
をすべき市町村長の数から当該市町村長のうち
指定市町村長であるものの数を減じた数に一を
加えた数とする。

本籍地外で届出又は申請をする場合（二箇所
以上の市役所又は町村役場で戸籍の記載をすべ
き場合を除く。）であつて、届出又は申請を受
理した市町村長及び当該届出又は申請により戸
籍の記載をすべき市町村長がいずれも指定市町
村長であるときは、法務大臣は、当該戸籍の記
載をすべき指定市町村長に対し、前条第一項の
提供を受けた旨を通知するものとする。

前項の場合においては、第三十六条第二項
（第百七条において準用する場合を含む。）の
規定は、適用しない。

第二百条 利害関係人は、特別の事由があ
る場合に限り、届出若しくは申請を受理した指
定市町村長又は当該届出若しくは申請によつて

戸籍の記載をした指定市町村長に対し、当該届出又は申請に係る届書等情報の内容を法務省令で定める方法により表示したものの閲覧を請求し、又は届書等情報の内容について証明書を請求することができる。

第十條第三項及び第十條の三の規定は、前項の場合に準用する。

第二百十條の七 第百條第二項の規定は、第百九條の規定により届出事件の本人の戸籍が磁気ディスクをもつて調製されている場合において、届出地及び分籍地の市町村長がいずれも指定市町村長であるときは、適用しない。

第二百十條の八 第百八條第二項の規定は、第百十九條の規定により届出事件の本人の戸籍が磁気ディスクをもつて調製されている場合において、届出地及び転籍地の市町村長がいずれも指定市町村長であるときは、適用しない。

第二百十一條 法務大臣及び指定市町村長は、電子情報処理組織の構築及び維持管理並びに運用に係る事務に関する秘密について、その漏えいの防止その他の適切な管理のために、電子情報処理組織の安全性及び信頼性を確保することその他の必要な措置を講じなければならない。

第二百十一條の二 電子情報処理組織の構築及び維持管理並びに運用に係る事務に従事する者又は従事していた者は、その業務に関して知り得た当該事務に関する秘密を漏らし、又は盗用してはならない。

第二百十一條の三 法務大臣は、行政手続における特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律（平成二十五年法律第二十七号）第十九條第八号又は第九号の規定による提供の用に供する戸籍関係情報（同法第九條第三項に規定する戸籍関係情報をいう。）を作成するため、第百十九條の規定により磁気ディスクをもつて調製された戸籍又は除かれた戸籍の副本に記録されている情報を利用することができる。

第七條 不服申立て
第二百十二條 戸籍事件（第百二十四條に規定する請求に係るものを除く。）について、市町村長の処分を不当とする者は、家庭裁判所に不服の申立てをすることができる。

第二百二十三條 戸籍事件（次条に規定する請求に係るものを除く。）に関する市町村長の処分又はその不作為については、審査請求をすることができない。

第二百二十四條 第十條第一項又は第十條の二第一項から第五項まで（これらの規定を第十二條の

二において準用する場合を含む。）、第四十八條第二項、第百二十條第一項、第百二十條の二第一項、第百二十條の三第一項及び第百二十條の六第一項の規定によりする請求について市町村長が行う処分又はその不作為に不服がある者は、管轄法務局長等に審査請求をすることができる。

第八章 雑則

第二百二十六條 市町村長又は法務局若しくは地方法務局長は、法務省令で定める基準及び手続により、統計の作成又は学術研究であつて、公益性が高く、かつ、その目的を達成するために戸籍若しくは除かれた戸籍に記載した事項又は戸籍その他市町村長の受理した書類に記載した事項に係る情報を利用する必要があると認められるものため、その必要の限度において、これらの情報を提供することができる。

第二百二十七條 戸籍事件に関する市町村長の処分については、行政手続法（平成五年法律第八十八号）第二章及び第三章の規定は、適用しない。

第二百二十八條 戸籍及び除かれた戸籍の副本、第四十八條第二項に規定する書類並びに届書等情報については、行政機関の保有する情報の公開に関する法律（平成十一年法律第四十二号）の規定は、適用しない。

第二百二十九條 戸籍及び除かれた戸籍の正本及び副本、第四十八條第二項に規定する書類並びに届書等情報に記録されている保有個人情報（個人情報の保護に関する法律（平成十五年法律第五十七号）第六十條第一項に規定する保有個人情報をいう。）については、同法第五章第四節の規定は、適用しない。

第二百三十條 情報通信技術を活用した行政の推進等に関する法律第六條第一項の規定により同項に規定する電子情報処理組織を使用してする届出の届出地及び同項の規定により同項に規定する電子情報処理組織を使用してする申請の申請地については、第四章及び第五章の規定にかかわらず、法務省令で定めるところによる。

第四十七條の規定は、情報通信技術を活用した行政の推進等に関する法律第六條第一項の規定により同項に規定する電子情報処理組織を使用してした届出及び申請について準用する。

第二百三十一條 この法律に定めるもののほか、届書その他戸籍事務の処理に関し必要な事項は、法務省令で定める。

第九章 罰則

第二百三十二條 第百二十一條の二の規定に違反して秘密を漏らし、又は盗用した者は、二年以下の拘禁刑又は百万円以下の罰金に処する。

第二百三十三條 戸籍に関する事務に従事する市町村の職員若しくは職員であつた者又は市町村長の委託（二以上の段階にわたる委託を含む。）を受けて行う戸籍に関する事務の処理に従事している者若しくは従事していた者が、その事務に関して知り得た事項を自己若しくは第三者の不正な利益を図る目的で提供し、又は盗用したときは、一年以下の拘禁刑又は五十万円以下の罰金に処する。

第二百三十四條 戸籍の記載又は記録を要しない事項について虚偽の届出をした者は、一年以下の拘禁刑又は二十万円以下の罰金に処する。外国人に関する事項について虚偽の届出をした者も、同様とする。

第二百三十五條 偽りその他不正の手段により、第十條第一項若しくは第十條の二第一項から第五項までの規定による戸籍謄本等の交付、第十二條の二の規定による除籍謄本等の交付若しくは第百二十條第一項の規定による戸籍証明書若しくは除籍証明書の交付を受けた者、第百二十條の三第二項の規定による戸籍電子証明書提供用識別符号若しくは除籍電子証明書提供用識別符号の発行を受けた者又は同条第三項の規定による戸籍電子証明書若しくは除籍電子証明書の提供を受けた者は、三十万円以下の罰金に処する。

第二百三十六條 偽りその他不正の手段により、第四十八條第二項（第百十七條において準用する場合を含む。以下この条において同じ。）の規定による閲覧をし、若しくは同項の規定による証明書の交付を受けた者又は第百二十條の六第一項の規定による閲覧をし、若しくは同条の規定による証明書の交付を受けた者は、十万円以下の過料に処する。

第二百三十七條 正当な理由がなくて期間内にすべき届出又は申請をしない者は、五万円以下の過料に処する。

第二百三十八條 市町村長が、第四十四條第一項又は第二項（これらの規定を第百十七條において準用する場合を含む。）の規定によつて、期間を定めて届出又は申請の催告をした場合に、正当な理由がなくてその期間内に届出又は申請をしない者は、十万円以下の過料に処する。

第二百三十九條 次の場合には、市町村長を十万円以下の過料に処する。
一 正当な理由がなくて届出又は申請を受理しないとき。
二 戸籍の記載又は記録をすることを怠つたとき。

三 正当な理由がなくて、届書その他受理した書類の閲覧を拒んだとき、又は第百二十條の六第一項の規定による請求を拒んだとき。
四 正当な理由がなくて、戸籍謄本等、除籍謄本等、第四十八條第一項若しくは第二項（これらの規定を第百十七條において準用する場合を含む。）の証明書、戸籍証明書若しくは除籍証明書を交付しないとき、戸籍電子証明書提供用識別符号若しくは除籍電子証明書提供用識別符号の発行をしないとき、又は戸籍電子証明書若しくは除籍電子証明書を提供しないとき。

五 その他戸籍事件について職務を怠つたとする。

第二百四十條 過料についての裁判は、簡易裁判所がする。

附則
第一條 この法律は、昭和二十三年一月一日から、これを施行する。

第二條 この附則で、新法とは、この法律による改正後の戸籍法をいい、旧法とは、従前の戸籍法をいい、新民法とは、この法律と同日に施行される民法の一部を改正する法律をいい、旧民法とは、従前の民法をいい、応急措置法とは、昭和二十二年法律第七十四号をいう。

第三條 旧法の規定による戸籍は、これを新法の規定による戸籍とみなす。ただし、新法施行後十年を経過したときは、旧法の規定による戸籍は、法務省令の定めるところにより、新法によつてこれを改製しなければならぬ。

第四條 旧法によつて定められた本籍は、新法によつて定められたものとみなす。

第五條 旧民法を適用する場合に關しては、新法施行後も、なお、旧法を適用する。

第六條 新法は、新法施行前の届出その他の事由によつて、戸籍の記載をし、又は新戸籍を編製する場合にもこれを適用する。

第七條 附則第三條第一項の戸籍に在る者について新戸籍を編製する場合には、同項の戸籍に在るその者の子でこれと引き続き氏を同じくする者は、新戸籍に入る。ただし、その子に配偶者

がいないときは、その子の配偶者も、新戸籍に入る。

第八條 新法は、新法施行前の届出その他の事由によつて、戸籍の記載をし、又は新戸籍を編製する場合にもこれを適用する。

第九條 附則第三條第一項の戸籍に在る者について新戸籍を編製する場合には、同項の戸籍に在るその者の子でこれと引き続き氏を同じくする者は、新戸籍に入る。ただし、その子に配偶者

又は戸籍を同じくする子があるときは、この限りでない。

前項の場合に、新本籍が従前の本籍地と同一の市町村内に定められたときは、第三十条第二項の規定は、これを適用しない。

第七條 第十九条第一項及び第九十九条の規定は、新民法附則第十二条の規定によつて従前の氏に復する場合にこれを準用する。

第八條 附則第三条第一項の戸籍に在る者で配偶者のある者は、配偶者とともにしなければ、分籍をすることができない。

第九條 応急措置法施行後新法施行前に、応急措置法第六條第二項前段の規定によつて、親権者を定める協議が調つたときは、親権者は、新法施行の日から十日以内に、協議を証する書面を添付して、その旨を届け出なければならぬ。この場合には、第三十八條第一項ただし書及び第三十九条の規定を準用する。

第十條 第七十八條の規定は、新民法附則第十四條第一項ただし書の規定によつて協議で親権者を定めようとする者にこれを準用する。第六十三條の規定は、新民法附則第十四條第二項又は第三項の規定を裁判が確定した場合において親権者にこれを準用する。

第十一條 新法施行の際現に後見監督人の地位に在る者は、新法施行の日から十日以内に第八十五條において準用する第八十一條又は第八十二條に規定する届出をしなければならぬ。

第十二條 附則第三条第一項の戸籍について転籍の届出があつたときは、新法の規定にかかわらず、従前の戸籍によつて戸籍を編製する。

第十三條 左の法令は、これを廃止する。
明治五年太政官布告第二百三十五号（改姓名に関する件）
明治六年太政官布告第一百八号（御歴代の御諱及び御名の文字の使用に関する件）
昭和十五年法律第四号（委託又は郵便による戸籍届出に関する件）
昭和二十一年司法省令第四十七号（昭和二十年勅令第五百四十二号ボツダム宣言の受諾に伴い発する命令に関する件に基く出生及び死亡の届出等に関する件）

この法律施行前にされた戸籍届出の委託については、昭和十五年法律第四号は、なお、その効力を有する。この場合には、同法第一条第一項の確認は、家庭裁判所がこれをする。第二百二十二條の規定は、前項の確認にこれを準用する。

第十四條 この法律施行前にした行為に対する過料に関する規定の適用については、なお、従前の例による。
第十五條 この法律施行の際現に裁判所に係属している過料事件については、なお、従前の例による。
附則（昭和二十二年二月二日法律第二六〇号）抄
第十條 この法律は、昭和二十四年一月一日から施行する。
附則（昭和二十四年五月三十一日法律第三七号）抄
1 この法律は、昭和二十四年六月一日から施行する。但し、戸籍法第十一条及び第二十八條第一項の改正規定は、昭和二十三年二月十五日から適用する。
附則（昭和二十五年五月四日法律第一四八号）抄
1 この法律は、昭和二十五年七月一日から施行する。
2 この法律の施行前における国籍の取得又は喪失に関しては、この法律の施行後も、なお、改正前の戸籍法を適用する。
附則（昭和二十七年四月二八日法律第一〇六号）抄
1 この法律は、法施行の日から施行する。
附則（昭和二十七年七月三十一日法律第二六八号）抄
1 この法律は、昭和二十七年八月一日から施行する。
附則（昭和三十一年六月二二日法律第一四八号）抄
1 この法律は、地方自治法の一部を改正する法律（昭和三十一年法律第四十七号）の施行の日から施行する。
附則（昭和三十七年三月二十九日法律第四〇号）抄
1 この法律は、昭和三十七年七月一日から施行する。
附則（昭和三十七年九月一五日法律第一六一号）抄

1 この法律は、昭和三十七年十月一日から施行する。
2 この法律による改正後の規定は、この附則に特別の定めがある場合を除き、この法律の施行前にされた行政庁の処分、この法律の施行前にされた申請に係る行政庁の不作為その他この法律の施行前に生じた事項についても適用する。ただし、この法律による改正前の規定によつて生じた効力を妨げない。
3 この法律の施行前に提起された訴願、審査の請求、異議の申立てその他の不服申立て（以下「訴願等」という。）については、この法律の施行後も、なお従前の例による。この法律の施行前にされた訴願等の判決、決定その他の処分（以下「判決等」という。）又はこの法律の施行前に提起された訴願等につきこの法律の施行後にされる判決等にさらに不服がある場合の訴願等についても、同様とする。
4 前項に規定する訴願等で、この法律の施行後は行政不服審査法による不服申立てをすることができるとなる処分に係るものは、同法以外の法律の適用については、行政不服審査法による不服申立てとみなす。
5 第三項の規定によりこの法律の施行後にされる審査の請求、異議の申立てその他の不服申立ての判決等については、行政不服審査法による不服申立てをすることができない。
6 この法律の施行前にされた行政庁の処分、この法律による改正前の規定により訴願等をするのできるものとされ、かつ、その提起期間が定められていなかったものについて、行政不服審査法による不服申立てをすることができ、この法律の施行前に行つた行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。
9 前八項に定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。
附則（昭和四五年四月一日法律第一二六号）抄
1 この法律は、公布の日から施行する。
附則（昭和五一年六月二五日法律第六六号）抄
1 この法律は、公布の日から施行する。ただし、第三条中戸籍法第十条、第十二條第二項、第四十八條第三項、第五十二条第一項、第二百一

十條、第二百一十一條、第二百二十二條及び第二百二十四條の各改正規定並びに同法第十二條及び第二百二十一條の次にそれぞれ一條を加える各改正規定は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。（戸籍法の一部改正に伴う経過措置）
4 第三条中戸籍法第五十二条第一項の改正規定の施行の日前十三日以内に出生した子について、同項の規定の改正により新たに届出義務者となつた母の届出に関する戸籍法第四十三條第一項の規定の適用については、同項中「届出事件発生の日」とあるのは、「民法等の一部を改正する法律（昭和五十一年法律第六十六号）第三条中戸籍法第五十二条第一項の改正規定の施行の日」とする。
5 附則第一項ただし書に掲げる各改正規定の施行前にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。
附則（昭和五五年五月一七日法律第五一号）抄
1 この法律は、昭和五十六年一月一日から施行する。
附則（昭和五九年五月二五日法律第四五号）抄
1 この法律は、昭和六十年一月一日から施行する。
（施行期日）
第一条 この法律は、昭和六十年一月一日から施行する。
（外国人と婚姻をした者の戸籍の編製に関する経過措置）
第七條 この法律の施行前に日本国民と日本国民でない者との婚姻の届出があつた場合の戸籍の編製については、なお従前の例による。
（出生等の届出に関する経過措置）
第八條 出生、死亡若しくは帰化の届出又は国籍の留保の意思表示に係る届出に関する第二条の規定による改正後の戸籍法（以下「新戸籍法」という。）の規定は、この法律の施行前に出生、死亡又は帰化があつた場合において同条の規定による改正前の戸籍法の規定の日が施行日以後となる届出についても適用し、同条の規定による改正前の戸籍法の規定により算定する日とならばその期間の満了の日が施行日前となる届出については、なお従前の例による。

(国籍の喪失があつた場合の戸籍の届出に関する経過措置)
第九條 この法律の施行前に国籍の喪失があつた場合の国籍喪失の届出については、なお従前の例による。

2 この法律の施行前に国籍を喪失した者は、国籍喪失の届出をすることができる。この場合において、新戸籍法第百三條第二項の規定を準用する。

(外国の国籍の喪失の届出に関する経過措置)
第十條 新戸籍法第百六條第一項の規定は、この法律の施行前に外国の国籍を喪失した場合については、適用しない。

2 外国の国籍をも有していた日本国民でこの法律の施行前にその外国の国籍を喪失したものは、その喪失の届出をすることができる。この場合においては、新戸籍法第百六條第二項の規定を準用する。

(外国人との婚姻による氏変更に関する経過措置)
第十一條 この法律の施行前に日本国民でない者と婚姻をした者が新戸籍法第百七條第二項の規定により施行日に氏の変更の届出をすることができる場合においては、その届出の期間は、施行日から六月とする。

(罰則の適用に関する経過措置)
第十二條 この法律の施行前にした行為及び附則第八條又は第九條第一項の規定により従前の例によることとされる届出事件に係るこの法律の施行後にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

(附則第五條第一項又は第六條第一項の規定によつて国籍を取得した場合の届出)
第十三條 新戸籍法第百二條の規定は、附則第五條第一項又は第六條第一項の規定によつて国籍を取得した場合の国籍取得の届出について準用する。

附則 (昭和六二年九月二六日法律第一〇一号) 抄
第一條 この法律は、昭和六十三年一月一日から施行する。

附則 (平成五年一月二二日法律第八九号) 抄
第一條 (施行期日)
第一條 この法律は、行政手続法(平成五年法律第八十八号)の施行の日から施行する。

(政令への委任)
第十五條 附則第二条から前条までに定めるもののほか、この法律の施行に関して必要な経過措置は、政令で定める。

附則 (平成六年六月二九日法律第六七号) 抄
第一條 (施行期日)
1 この法律は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(戸籍の改製に関する経過措置)
2 第一条の規定による戸籍法の改正に伴う戸籍の改製に関する事務に、市町村長の委託を受けて従事している者又は従事していた者は、その事務に関して知り得た事項をみだりに他人に知らせ、又は不当な目的に使用してはならない。

3 第一条の規定による改正後の戸籍法第二条から第四条までの規定は、前項の事務について準用する。

4 前二項に定めるもののほか、第一条の規定による戸籍法の改正に伴う戸籍の改製に關し必要な経過措置は、法務省令で定める。

附則 (平成二一年五月一四日法律第四三号) 抄
第一條 (施行期日)
第一條 この法律は、行政機関の保有する情報の公開に関する法律(平成十一年法律第四十二号。以下「情報公開法」という。)の施行の日から施行する。

附則 (平成二一年七月一六日法律第八七号) 抄
第一條 (施行期日)
第一條 この法律は、平成十二年四月一日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 第一条中地方自治法第二百五十條の次に五條、節名並びに二款及び款名を加える改正規定(同法第二百五十條の九第一項に係る部分(両議院の同意を得ることに係る部分に限る。))に限る。、第四十條中自然公園法附則第九項及び第十項の改正規定(同法附則第十項に係る部分に限る。)、第二百四十四條の規定(農業改良助長法第十四條の三の改正規定に係る部分を除く。))並びに第四百七十二條の規定(市町村の合併の特例に関する法律第六條、第八條及び第十七條の改正規定に係る部分を除く。))並びに附則第七條、第十條、第

十二條、第五十九條ただし書、第六十條第四項及び第五項、第七十三條、第七十七條、第一百五十七條第四項から第六項まで、第六百六十二條、第六百六十三條、第六百六十四條並びに第二百二條の規定 公布の日

(国等の事務)
第二百五十九條 この法律による改正前のそれぞれの法律に規定するもののほか、この法律の施行前において、地方公共団体の機関が法律又はこれに基づく政令により管理し又は執行する国、他の地方公共団体その他公共団体の事務(附則第六十一條において「国等の事務」という。))は、この法律の施行後は、地方公共団体が法律の事務として処理するものとする。

(処分、申請等に関する経過措置)
第六十條 申請等に関する経過措置
第六十條 この法律(附則第一条各号に掲げる規定については、当該各規定。以下この条及び附則第六十三條において同じ。))の施行前に改正前のそれぞれの法律の規定によりされた許可等の処分その他の行為(以下この条において「申請等の行為」という。))又はこの法律の施行の際現に改正前のそれぞれの法律の規定によりされた許可等の申請その他の行為(以下この条において「申請等の行為」という。))で、この法律の施行の日においてこれらの行為に係る行政事務を行うべき者が異なることとなるものは、附則第二条から前条までの規定又は改正後のそれぞれの法律(これに基づく命令を含む。))の経過措置に関する規定に定めるものを除き、この法律の施行の日以後における改正後のそれぞれの法律の適用については、改正後の行為又は申請等の行為とみなす。

この条において「処分」という。))に施行日前に行政不服審査法に規定する上級行政庁(以下この条において「上級行政庁」という。))があつたものについては、同法による不服申立てについては、施行日以後においても、当該処分庁に引き続き上級行政庁があるものとみなして、行政不服審査法の規定を適用する。この場合において、当該処分庁の上級行政庁とみなされる行政庁は、施行日前に当該処分庁の上級行政庁であつた行政庁とする。

2 前項の場合において、上級行政庁とみなされる行政庁が地方公共団体の機関であるときは、当該機関が行政不服審査法の規定により処理することとされる事務は、新地方自治法第二条第九項第一号に規定する第一号法定受託事務とする。

(手数料に関する経過措置)
第六十二條 施行日前においてこの法律による改正前のそれぞれの法律(これに基づく命令を含む。))の規定により納付すべきであつた手数料については、この法律及びこれに基づく政令に別段の定めがあるもののほか、なお従前の例による。

(罰則に関する経過措置)
第六十三條 この法律の施行前にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

(その他の経過措置の政令への委任)
第六十四條 この附則に規定するもののほか、この法律の施行に伴い必要な経過措置(罰則に関する経過措置を含む。))は、政令で定める。

(検討)
第六十五條 新地方自治法第二条第九項第一号に規定する第一号法定受託事務については、できる限り新たに設けることのないようにするとともに、新地方自治法別表第一に掲げるもの及び新地方自治法に基づく政令に示すものについては、地方分権を推進する観点から検討を加え、適宜、適切な見直しを行うものとする。

第六十五條 政府は、地方公共団体が事務及び事業を自主的かつ自立的に執行できるように、国と地方公共団体との役割分担に応じた地方税財源の充実確保の方途について、経済情勢の推移等を勘案しつつ検討し、その結果に基づいて必要な措置を講ずるものとする。

附則 (平成二一年二月八日法律第一五一号) 抄
第一條 (施行期日)
第一條 この法律は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成二一年七月一六日法律第八七号) 抄
第一條 (施行期日)
第一條 この法律は、平成十二年四月一日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 第一条中地方自治法第二百五十條の次に五條、節名並びに二款及び款名を加える改正規定(同法第二百五十條の九第一項に係る部分(両議院の同意を得ることに係る部分に限る。))に限る。、第四十條中自然公園法附則第九項及び第十項の改正規定(同法附則第十項に係る部分に限る。)、第二百四十四條の規定(農業改良助長法第十四條の三の改正規定に係る部分を除く。))並びに第四百七十二條の規定(市町村の合併の特例に関する法律第六條、第八條及び第十七條の改正規定に係る部分を除く。))並びに附則第七條、第十條、第

十二條、第五十九條ただし書、第六十條第四項及び第五項、第七十三條、第七十七條、第一百五十七條第四項から第六項まで、第六百六十二條、第六百六十三條、第六百六十四條並びに第二百二條の規定 公布の日

(施行期日)
第一条 この法律は、平成十二年四月一日から施行する。

(施行期日)
第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(施行期日)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(施行期日)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(経過措置)
第三条 民法の一部を改正する法律(平成十一年法律第四十九号)附則第三条第三項の規定により従前の例によることとされる準禁治産者及びその保佐人に関するこの法律による改正規定の適用については、次に掲げる改正規定を除き、なお従前の例による。

(経過措置)
第四十二条 この法律の施行前に改正前のそれぞれの法律(これに基づく命令を含む。以下この条において同じ。)の規定によつてした処分、手続その他の行為であつて、改正後のそれぞれの法律の規定に相当の規定があるものは、この附則に別段の定めがあるものを除き、改正後のそれぞれの法律の相当の規定によつてしたものとみなす。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(施行期日)
第一条 この法律は、平成十二年四月一日から施行する。

(施行期日)
第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(施行期日)
第一条 この法律は、平成十二年四月一日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(施行期日)
第一条 この法律は、平成十二年四月一日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(施行期日)
第一条 この法律は、平成十三年一月六日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(施行期日)
第一条 この法律は、平成十三年一月六日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(施行期日)
第一条 この法律は、平成十三年一月六日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(経過措置)
第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

八条第二項の規定によりされた請求に係る戸籍事件及び当該戸籍事件についての不服申立てについては、なお従前の例による。

2 この法律の施行前に旧法第四十八条第一項の規定によりされた請求に係る戸籍事件については、なお従前の例による。

第三条 この法律の施行前にした行為及び前条第一項の規定によりなお従前の例によることとされる場合におけるこの法律の施行後にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

附則 (平成二三年五月二五日法律第五号) 抄
この法律は、新非訟事件手続法の施行の日から施行する。

附則 (平成二三年六月三日法律第六一号) 抄
この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日(以下「施行日」という。)から施行する。

第六条 この法律の施行前に生じた事由であつて、第四条の規定による改正前の戸籍法第七十九條において準用する同法第六十三條第一項の規定並びに同法第八十一條及び第八十二條(これらの規定を同法第八十五條において準用する場合を含む。)の規定により届け出なければならぬとされているものについての届出については、なお従前の例による。

2 この法律の施行前にした行為及び前項の規定によりなお従前の例によることとされる場合におけるこの法律の施行後にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

附則 (平成二六年五月三〇日法律第四二号) 抄
この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成二六年六月一三日法律第六九号) 抄
この法律は、行政不服審査法(平成二十六年法律第六十八号)の施行の日から施行する。

第五条 (経過措置の原則)
行政庁の処分その他の行為又は不作為についての不服申立てであつてこの法律の施行前

にされた行政庁の処分その他の行為又はこの法律の施行前にされた申請に係る行政庁の不作為に係るものについては、この附則に特別の定めがある場合を除き、なお従前の例による。

第六條 この法律による改正前の法律の規定により不服申立てに対する行政庁の裁決、決定その他の行為を経た後でなければ訴えを提起できないこととされる事項であつて、当該不服申立てを提起しないでこの法律の施行前にこれを提起すべき期間を経過したもの(当該不服申立てが他の不服申立てに対する行政庁の裁決、決定その他の行為を経た後でなければ提起できないとされる場合であつては、当該他の不服申立てを提起しないでこの法律の施行前にこれを提起すべき期間を経過したものを含む。)の訴えの提起については、なお従前の例による。

2 この法律の規定による改正前の法律の規定(前条の規定によりなお従前の例によることとされる場合を含む。)により異議申立てが提起された処分その他の行為であつて、この法律の規定による改正後の法律の規定により審査請求に対する裁決を経た後でなければ取消しの訴えを提起することができないこととされるもの取消しの訴えの提起については、なお従前の例による。

3 不服申立てに対する行政庁の裁決、決定その他の行為の取消しの訴えであつて、この法律の施行前に提起されたものについては、なお従前の例による。

第九條 この法律の施行前にした行為並びに附則第五条及び前二条の規定によりなお従前の例によることとされる場合におけるこの法律の施行後にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

第十條 附則第五条から前条までに定めるもののほか、この法律の施行に關し必要な経過措置(罰則に關する経過措置を含む。)は、政令で定める。

附則 (平成二八年五月二七日法律第五一号) 抄
この法律は、公布の日から起算して一年六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年六月を超えない範囲内において政令で定める日

から施行する。

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年六月を超えない範囲内において政令で定める日

から施行する。

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年六月を超えない範囲内において政令で定める日

から施行する。

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年六月を超えない範囲内において政令で定める日

から施行する。

附則 (令和元年五月三一日法律第一六号) 抄
この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (令和元年五月三一日法律第一七号) 抄
この法律は、公布の日から起算して二十日を経過した日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 略

二 第二十四条、第四十四条及び第八十七条第二項の改正規定 公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日

三 目次の改正規定(「特例」を「特例等」に改める部分に限る。)、第六章の章名の改正規定及び同章に三條を加える改正規定(第二百一十一條の三に係る部分に限る。)

並びに附則第十三條の規定 公布の日から起算して三年を超えない範囲内において政令で定める日

四 略

五 第二百二十條の次に七條を加える改正規定、第二百二十四條の改正規定(市役所又は町村役場の所在地を管轄する法務局又は地方公務局の長)を「管轄法務局長等」に改める部分を除く。、第二百二十八條から第三百三十一條の改正規定、第二百三十七條を改め、同條を第三百二十九條とする改正規定(第三百三十七條を改める部分に限る。)、第三百三十四條を改め、同條を第三百三十六條とする改正規定(第三百三十四條を改める部分に限る。)

及び第三百三十三條を改める部分に限る。)

並びに附則第七條から第十條まで及び第十四條(前号に掲げる部分を除く。)

の規定 公布の日から起算して五年を超えない範囲内において政令で定める日

(第三号施行日の前日までの間等の読替え)

附則 (令和二年五月二九日法律第三三号) 抄
この法律は、公布の日から起算して二年六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (令和三年五月一九日法律第三七号) 抄
この法律は、令和三年九月一日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 第二十七條(住民基本台帳法別表第一から別表第五までの改正規定に限る。)、第四十五條、第四十七條及び第五十五條(行政手続に關する特定の個人を識別するための番号の利用等に關する法律別表第一及び別表第二の改正規定(同表の二十七の項の改正規定を除く。))に限る。)

並びに附則第八條第一項、第五十九條から第六十三條まで、第六十七條及び第七十一條から第七十三條までの規定 公布の日

から施行する。

二 附則第十八條(戸籍法第二百二十九條の改正規定を除く。)

及び第五十三條(行政手続に

關する法律に關する経過措置)

電子情報処理組織によつて戸籍事務を取り扱う市町村長の指定に係る経過措置)

第三条 この法律の施行の際現にこの法律による改正前の戸籍法(以下「旧法」という。)

第十八條第一項(旧法第四條において準用する場合を含む。)

の規定による指定を受けている市町村長(特別区の区長を含むものとし、地方自治法第二百五十二條の十九第一項の指定都市にあつては、区長又は総合区長とする。)

